



“Ethical Design”具現化、今後は産業界に発信

(株)船場 本社リニューアル

商業施設やオフィス、教育・文化施設等の企画・設計・施工を業務とする(株)船場の本社（東京都港区芝浦1-2-3シーバンスS館9階）は2021年4月、本社オフィスの全面リニューアルを完了した。同社は従来、2フロアを借りていたがコロナ禍、テレワーク推進により出勤率は30%を切った状況を考慮、1フロアに縮小した。オフィス面積は約2000㎡。同オフィスに勤務する社員数は300人、席数は約390席。フロアの縮小に伴い、ワークスタイルを固定席からフリーアドレス、ABWに転換した。

同社のリニューアルの最大の特長は、“Semba Ethical（エシカル）Design Thinking”、今あるものを活用しながら新たな価値創造を遂行していくオフィスにしたこと。資源循環型のリノベーションを取り入れ、資源のリターン・リユース・リサイクルだけでなく、リニューアル前に使用していた家具什器、備品、使用済みのマテリアルサンプル、現場工事で排出した廃材を、ファニチャー・アート作品としてアップサイクルするなど、さまざまなエシカルデザインを随所に施した。※ Ethical（エシカル）とは倫理的、道徳的の意味。

今回、エシカルデザイン本部ディレクターの成富法仁氏、本田洋介氏にお話をうかがった。

船場は全社でデジタルとエシカルを企業改革の重要テーマとして掲げ、エシカルデザインを推進している。

“Semba Ethical Design Thinking”とは、地球環境への配慮、思いやりの観点から、空間創造事業におけるすべてのプロセスを社員一人ひとりが“Rethink”することから始めるデザインの考え方。サステナブル社会に求められる空間設計の新たなテーマとして、循環型の内装設計“エシカルデザイン”を推進している。

このエシカルデザインの考え方は、突然湧いて出てきたものなのだろうか。成富氏は「当社では商業施設分野に大きなウエートを置く企業。手掛ける商業店舗は平均5、6年で解体、改装されている。1店舗あたり数千万円、数億円単位で投資され、当初から5、6年での解体、改装が事業計画に盛り込まれている。最近では、地域・地元のインフラである銀行ですら短期間での改装を余儀なくされる例もある。

数日間の開催で終了する各種展示会でもブース設営、資材の解体、廃棄が繰り返される事態が続いている。昨今のコロナ禍の影響も大きく、この



ままではいけないとずっと思っていた。環境負荷の課題も含めて、倫理的に正しいモノづくりを目指すべきだと船場全体で考えるようになった。

大金を投資して造ったものを短期間で壊して廃棄、ゴミの山になっている現実。改修のたびに資材や家具什器が捨てられているのを見て、違

和感を感じていた。エシカルの考え方をもち、社内外に発信することによって少しでもこの違和感に気づき改善していく共感の輪を広げていけないかと考えた。その取り組みや発信を徐々に進めているところ」と語る。

リニューアルしたオフィスはABW実現に向けて、試しながら造作していくことができる「HACKABLE（ハッカブル）DESIGN」をデザインコンセプトとし、「デジタルとエシカル」を取り入れた空間設計を施工した。オフィスゾーニングはワークシーンに合わせて場所を選択できる設計とした。すべての場所でミーティングやソロワークができるワークプレイスになっている。

現場工事で使用しなくなったカラーコーンやマテリアルサンプルを活用、ファニチャーとして使用している。使わなくなった備品やディスプレイ、サンプルなどの廃材で作ったアート作品を飾り棚に展示し、オフィスの記憶を継承している。また、オフィス縮小・ABWへのシフトで大量の廃棄物になったはずのデスクやワゴンを積み重ねて、階段状の「丘」を造成した。フラットなオフィスでなく、立体的な変化のあるオフィスに変化させた。

駆け足でゾーン構成を紹介する。
○Collabo（コラボ）…来客・パートナー・社員で使うコラボレーションエリア。ミーティングやショールーム、カフェ、配信機能、執務スペー



スとして利用する。レイアウトも自由に再配置しながら過ごせる場所。可動式パーティションは再生材の端材から制作し、1面をホワイトボード塗装にした。配信撮影を行うステージ壁にコンテンポラリーデザインスタジオwe+との共同リサーチプロジェクト第1弾となる「Link」を新設。「Link」は社内から出た木材やレンガ、タイルなどのサンプル廃材を砕き固めて作ったオリジナルマテリアル。

○Material（マテリアル）…マテリアル全般の情報ストックの場所。ピックアップしたマテリアル・新着情報の展示、リアルサンプルの組み合わせを確認する場所。

○Prototyping（プロト）…模型や試作品を製作できる工具・機材を備え、アイデアを具現化してみる場所。モノに触れながら考える大切な場所。

○Project（プロジェクト）…プロジェクトチームを立ち上げ、メンバーが集まり懸案事項を進めていく場所。期間借りも可能。短期集中コンペ等の際には、素材並べをキープしながらの執務にも対応できる。予約がない場合はソロワークにも使用できる。

○5 OPEN（オープン）…デスク＋モニター置きのスタンドタイプ

は誰もが利用できるフリーエリアと、部門別エリア設定の場所がある。その他、窓辺カウンター、立ちながら執務のスタンドブース、テレビ会議対応ブースなど、多様なソロワークが展開できる。既存什器を活かしながらさまざまなスタイルを展開する工夫を凝らしている。再生材でニューテーブルを作ったり、窓辺のペリメーターに天板を載せてカウンターにしたりしている。

○丘（オカ）…捨てない既存什器のストックの場を、倉庫ではなく広場として活用した。什器を積み上げた丘は執務エリアの広場として機能している。カジュアルなスタイルで

個々のリフレッシュや社内セミナーにも活用できる。

○Library（ライブラリー）…書籍のリソースを共有しながら新たな気づきを発見できる場所。パンフや施設情報など、情報共有の場所になっている。

○Box（ボックス）…集中したいソロワークや、チームミーティングを行う場所。ソファなどの芯材に利用されるクッション材を吸音パネルとしてパーティションに利用。

なお、5月にはコンテンポラリーデザインスタジオwe+と船場が共同作成した、アートワーク「Link」をコ



ラボエリア内配信スタジオに設置した。「Semba Ethical Design Thinking」に基づいて作られた、廃棄建材の新たな可能性にリーチするアートワーク。木や金属、レンガなどの廃棄建材を細かく砕き、粒度を変えながら固めることで、複雑な表情と独特の味わいを表現している。新たな頑丈な建材として家具や壁面等、さまざまな使用展開ができる製品。

廃棄物をアート作品としてアップサイクルしたのは、インクロッチェ（株）。作品はオフィス内に展開されている。他にも（株）モノファクトリーとの連携で廃棄物に命を吹き込み、観葉植物用の鉢にしてオフィス内緑化に彩りと存在感を示している。産業廃棄物を可能な限り分別回収し、混合廃棄物を削減しリサイクル率を向

上させている（株）ナカダイとも協力体制を組んでいる。

今回のリニューアルで働き方は大きく変化した。社員の皆さんに戸惑いはなかったのだろうか。本田氏は「当初、困惑はあったが2、3カ月で徐々に慣れてきたようにも感じる。ステップを踏みながら、いい働き方をしていこうという考えが生まれてきた。皆でハッカブルを吸収しながら、自分たちで働き方を変えるのだという意識が出てきたこと、どんどん進化していると感じている」と語る。新オフィスの満足度については「4月段階で半数以上がよかったと言っている。使い方を馴染ませるのはこれから段階」という。

同社の「Semba Ethical Design

Thinking」思想は産業界、社会的な見地からも必須課題といえる。今後、同社はどのような活動を展開しようとしているのだろうか。成富氏は「産業界の意識ある経営者はエシカルデザインの重要性に気づいているし、今後ますます強くなっていくと思う。経済合理性の点から取り組むべき課題となっている。この課題に目を向けることが企業の強みになると考えている。当社は今後もこの考えを機会あるごとに発信していく」と語る。本田氏は「先日、新オフィスの見学ツアーを企業向けに行ったが、大きな共感を得た。具体性を持ってイメージして帰っていただいた。世の中にエシカルデザインの考えが広がり、実現できてくるといいなと思う」と感触を語った。

写真：青木勝洋写真事務所